

主 題：新しい人生を生きる 3

聖書箇所：ヘブル人への手紙 11章5－6節

クリスチャンは新しく生まれ変わった者たちであると学びました。私たちは主によって生まれ変わらされた者として、新しい人生を生きる者となったとみことばは教えてくれます。前回、私たちは「神を愛する者として生まれ変わった」ということを見ました。今日は二つ目、「信仰をもって生きる者とされた」ということ、「信仰」について神のみことばを学んでいきます。テキストはヘブル人への手紙 11章です。

A. 信仰：神に喜ばれるカギは「信仰」である

まず、6節を見てください。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。…」とあります。ということは、神に喜ばれることをするためのカギは「信仰」だということです。神は「信仰」を喜ばれるとみことばは教えるわけですが、私たちが考えなければいけないことは、では、どのような信仰を神は望んでおられるのか、どのような信仰を神は喜ばれるのかということです。感謝なことに、このヘブル書の著者はそのことを私たちに教えてくれています。その前に、「信仰」とは何か？その定義を見ます。

1. その定義

「信仰」とは何か？もし、要約するならこのように言えます。「神、また、神のおことばである聖書への揺るがない信頼である」。神に対して、そして、神がくださったこの聖書のみことばに対する私たちの揺るがない信頼であると。なぜ、このように定義したのか？実は、そのことを著者が私たちに教えてくれるからです。ヘブル11：1をご覧ください。「信仰は望んでいる事からを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」とあります。「信仰とは何か？」について、ここに二つのことが記されています。一つは「望んでいる事からを保証し」、もう一つは「目に見えないものを確信させるもの」です。

* 「信仰」とは何か？

1) 望んでいる事からを保証し

これは「神の御約束への信頼と確信」です。神が与えてくださった約束への信頼と確信です。私たちの希望について「望んでいる事から」と著者は記しています。私たちクリスチャンはこの希望をもって生きている者たちです。神の約束に立って生きている者です。主はこのような約束をくださった、私たちはそれを信じています。その神の約束を信じて生きる、それが信仰だと言うのです。

ここに「保証し」ということばがありますが、この名詞は「土台、自信、確信」という意味があります。そうすると、私たちクリスチャンが持っている希望はフィフティフィフティという果たしてそうなのかどうか分からないようなものではないし、そうやってほしいという淡い希望でもありません。私たちの希望は確実にそうなるという確信なのです。神が約束なさったなら必ずそうなります。それを信じるのが信仰です。ですから、私たちが望んでいる事から、私たちの希望を保証する、確信をもたらす、それが信仰だと著者は私たちに教えるのです。

ですから、まず、著者が言うことは、私たちがどう思うかではなく、人がどう言うかでもなく、神が言われたなら必ずその通りになるということです。これを信じること、それが信仰だと言います。そして、このような信仰は成長するものです。

◎どのように信仰は成長するのか？

・この約束を与えてくださったお方をより深く知ること

つまり、約束をくださった神をより深く知ることによって私たちの確信が増します。イザヤはユダのヒゼキヤ王にこのように言います。Ⅱ列王記20：9「イザヤは言った。「これがあなたへの【主】からのしるしです。【主】は約束されたことを成就されます。影が十度進むか、十度戻るかです。」。力に溢れた、確信に溢れた真理です。だから、神なのです。だから、全能のお方なのです。ですから、私たちはその方を深く知ることによって、私たちも同じように確信をもって歩むことができます。

・「過去の出来事」からのレッスンを学ぶこと

同時に、私たちの確信が増していくためには、過去の出来事を学ばいいのです。これまでの多くの信仰の先輩たちは、主を信頼して約束を信じて生きて来ました。そして、神がどのように彼らを扱われたのか？彼らのその人生の終わりがどうだったのか？そのことが聖書に記されています。それを見ることによって私たちは、私たちも彼らと同じように歩めばいいのだと教えられます。パウロはローマ人への手紙でこのように言っています。15：4「昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。…」と。聖書は後の時代、今の私たちが大切なことを学ぶために記されていると言うのです。「それ

は、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」と続きます。私たちが希望を持つために聖書が与えられていると言うのです。だから、しっかり正しく聖書を学ぶことが大切です。そして、それを信じることです。神は約束されたことを必ず守られると…。

2) 目に見えないものを確信する

神のみことばへの信頼と確信です。約束だけでなく、神のみことばに対する信頼と確信です。というのは、ここに「目に見えないものを確信する」と言っています。「確信する」ということばは「証拠、根拠、証明」です。つまり、目に見えないけれどそれが事実であると確信するということです。たとえば、私たちは目に見えない神を信じています。「私は神を見たから信じた」という人はどこにもいません。なぜなら、私たちは神を見ることができないからです。神は完全であるが、私たちは不完全だからです。また、神は霊だと言われています。

では、目に見ることができない神をどうして信じたのか？すべてはこの聖書です。聖書を通して私たちは、どのような神がおられるのかを知りました。聖書の教えだからそのことを信じたのです。これまで、数千年に亘ってこの聖書は試されて来ました。人々は聖書の中に誤りを見つけようとして、様々な角度から聖書を攻撃して来ました。しかし、聖書はそのすべての攻撃に勝利しました。だれ一人として聖書の中に誤りを見つけることはできないのです。当然です。神が書かれ、神が与えてくださったものだからです。ですから、私たちは神がくださった聖書を通して、大切な真理を知ることができます。

◎聖書が教える神とは？

・「真の神」について

聖書は「真の神」について教えるので私たちはその神を知ることができました。パウロがこう言っています。Ⅰテモテ1：17「どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」と。確かに、見ることはできません。しかし、聖書が教えるゆえに、私たちは信じています。

・「罪の赦し、救い」について

目に見えないものを信じているということを考えたときに、私たちの救いもそうです。私たちは聖書からイエス・キリストによって罪の赦し、救いが与えられるということを聞き、そして、それが聖書の教えであるゆえに私たちはそれを信じました。私たちはだれ一人イエス・キリストの十字架を見ていません。その死から敢然と肉体をもってよみがえって来られたイエス・キリストをこの目で見たこともありません。では、なぜ、私たちはそのことを信じているのか？神がくださったこの聖書がそのことを私たちに教えるからです。そして、それだけでなく、信じた私たちに聖書が教えていることが実際に起こるからです。実際に体験するのです。だから、罪赦されたことによって私たちは本当にそのことを実感し、そのことを感謝するのです。神が言われたことを私たちが心から受け入れたときに、神はこのように私たちに私たちのうちに為してくださるのです。

ですから、私たちは確かに聖書が教えているからこれが真実だと信じています。そして、主が私たちを生まれ変わらせてくださった、この事実が真の神がおられること、そして、イエス・キリストによる救いが本物であることを私たちは確信しています。だれかがそう言ったから信じているのではありません。みことばに立ち、主がみことばを通して私たちの人生に為してくださったそのみわざに私たちの確信があるのです。

ですから、目に見えないものを確信すること、すなわち、目に見えなくても神の言われたことは真実であるというその確信をもたらすのが信仰だと著者は言うのです。「私は目に見えるものしか信じない」という人はたくさんいます。それなら、残念ながら、いつまで経っても神を見ることは叶いません。目で見ていなくても私たちは信じています。

ですから、信仰というのは、望んでいる事がら、私たちの希望に対して確信を持たせてくれるだけでなく、たとえ、目に見えないことであっても、それが真実であるという確信をもたせてくれるのです。

2. 信仰の対象

これらのことを記した後に、著者は「信仰の対象」について教えています。信仰を頂くためにはいったい何を信じたらいいのか？そのことを11章6節のみことばが教えています。もう一度見ましょう。

「信仰がなくしては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」。二つのことを教えています。

1) 「真、唯一の神の臨在」を信じること

著者が私たちに言うのは「神に近づく者は、神がおられることと、」とあります。生きた聖い真の神がおられると。パウロはこのように言っています。Ⅰコリント8：4, 6「：4 そういうわけで、偶像にささげた肉を食べることについてですが、私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。」「：6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのもの

はこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちも主によって存在するのです。」、すごい教えです。「世の偶像の神は実際にはないものである」と。神と名の付くものはこの世にあふれているが、それらは神ではない、神はひとりだと言います。確かに、神と名の付くものはたくさんある、コリントの教会もコリントの町もそうでした。アテネの町も偶像に満ち溢れたところでした。そこでパウロはこのように教えます。たとえ、神と名が付いていたとしても、本当の神はひとりしかいないと。

6節に「すべてのものはこの神から出ており、」とあります。つまり、本当の神はすべてのものの創造主だと言います。それがその崇拝の対象が真の神であるかどうかを見極めるところです。私たちの周りに存在する神と名のついているものはみな創造主ではありません。しかし、この聖書が教える神こそがすべてを造られた創造主なる神です。そのことをパウロは言うのです。ですから、私たちが何を信じたらいいのか？著者が教えるのは「唯一真の神が存在する、その正しい真の神をあなたは信じなさい」です。

2) 「神による公正なさばきがある」と信じること

さばきが必ず来るということです。イエスを信じているあなたにとって、その日はすばらしい神からの報いをいただく日です。しかし、この真の神を信じていない人にとってこのさばきは非常に恐ろしい日です。すべての罪が明らかにされてその罪のさばきを受けるからです。実は、この後で見ますが、エノクという旧約聖書に出て来る一人の人物のことが書かれています。ユダ14、15に「アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。:15 すべての者にさばきを行い、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」とあります。さばきのことです。なぜなら、この前後を見ると、神に逆らっている人たちへのさばきの警告が記されているからです。

神のメッセージは全然変わっていません。旧約時代も新約時代も、神は常に人類に対して、罪のさばきが必ず来ることを警告し続けて来られました。ノアの洪水もそうでした。神が下されたさばきは、必ずさばきの日が来るということを示していました。ですから、私たちが信じなければいけないこととしてこの著者が教えていることの二つ目は、私たちは必ず神の前に立ち、神から公正な審判を受けるということです。もちろん、私たちクリスチャンは罪のさばきを受けるわけではありません。罪の問題は解決しています。私たちがこの地上で救いに与って以来、どのように主の前を歩んで来たかによります。何をしたかではありません。どのように主に従って来たか、みことばに忠実に歩んで来たかどうかです。そのことに基づいて主はさばきを下されます。

ですから、その日が来ると信じて、そのことを覚えている人たちは今日をどのように生きたいのかを真剣に考えます。私たちは明日どう生きようかを考えるのではなく、今日をどのように生きようかを考える者たちです。なぜなら、神が与えてくださったのは今日です。だれ一人として、必ず自分に明日が訪れると確信をもっている人はいません。確信を持つことはできません。分かっていることは、今この瞬間を神は私にくださっている、つまり、この瞬間を神の前に正しく歩んでいきなさいということ。神は私たちに教え、そして、私に命じておられるのです。ですから、信仰者の皆さん、私たちはイエス・キリストの前に立ちます。その時に後悔しないためには、今、主にしっかりと従い続けていくことです。そして、その生き方は決して無駄な生き方ではありません。でも、その選択はあなた自身がすることです。どういう選択をするのか？

ヘブル11:6をもう一度見ると「神を求める者には報いてくださる…」とあります。私たちが神の前に正しく歩んでいくな、神は必ずそれに対してふさわしい報いを与えてくださる。だから、主の前に正しく生きていこう、神がお喜びになることを行なっていこうとします。私たちがそのように考えて生きていくのは、救いに与っているからです。神が私たちを救ってくださったなら、私たちは新しく造り変えられるのです。学んで来ている通りです。新しい人生が始まったのです。その人生というのは、神に喜ばれることをしていこうという人生です。ですから、与えられたこの日を神の前に正しく神が喜ばれることをしていこうと、そのように私たちは造り変えられたのです。その生き方が私たちに救いが与えられていることを明らかにするのです。

ですから、このすばらしい信仰をいただくためには、真の神がおられること、そして、その方の前でさばきを受けるということを受け入れることが必要なのです。

3. 実存の信仰者たち

6節の前後を見ると、たくさんの人の名前が出て来ます。というのは、その人たちは実際にそのように生きた人だからです。実例がたくさん出て来ます。今からその中の何人かを見ていきます。

1) アベル

4節にはカインとアベルのことが記されています。「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。…」、カインとアベルの兄弟で

す。聖書はこのアベルは救いに与っていた信仰者であったと教えます。真の神を信じていました。ところが、カインはそうではありませんでした。なぜ、そのことが分かるのでしょうか？それは彼らの行ないです。「アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、」と書かれています。二人ともいけにえをささげたのです。見た目には同じことをしています。ところが、その後を見ると「神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。」とあります。つまり、ささげるという行為だけを見ると同じですが、神はそれぞれの心を見ておられて、アベルのささげ物を喜ばれたのです。彼の心が正しかったからです。

私たちが何度も学んでいるように、あなたがこの礼拝堂に座していることを神は喜んでおられるかどうか？喜んでおられない可能性もあるのです。あなたがささげている礼拝を神は喜んでおられない可能性もあるのです。問題はあなたの心です。どのような思いをもってここに集っているのでしょうか？どんな思いをもって神を見上げているのか？です。神がご覧になっているのはあなたの行ないではなく、あなたの心です。ここでもそのことを明らかにしています。確かに、神は私たちの心を見ておられる。神でなければ分からないことです。人々の目には二人ともすばらしいと映ったかもしれませんが、神はカインのささげ物には目を留められなかったのです。

先ほどから見てるように、また、何度も学んでいるように、本当の信仰、本当の救いはその人に変化をもたらします。神によって救われた人は神を愛する者へと生まれ変わります。神を愛する者へと生まれ変わったゆえに、その人は神が喜ばれることが何かを考えて選択して生きるのです。ですから、このアベルのささげ物を見たときに、神がお喜びになるささげ物をささげたのは彼が神を愛していたからです。アベルはどうすれば神を喜ばせることができるのかを考えたのです。その心が正しかったゆえにそのささげ物を神は喜んでお受けになったのです。カインを見ると、カインは自分のささげ物が受け入れられなかったこと、そして、自分ではなく弟のささげ物が受け入れられたこと、その事実には彼は怒りをもって弟を殺そうとし、実際に殺しました。どうでしょう？カインの心の中には神を喜ばせたいという思いがあったかどうか？もし、そうなら違った反応をしたでしょう。ですから、このカインについてみことばはこのように教えるのです。Ⅰヨハネ 3：12「カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行いは悪く、兄弟の行いは正しかったからです。」、「彼は悪い者から出た者で、」とみことばは彼が救われていなかったことを明らかにしています。また、ユダ 11 節には「忌まわしいことです。彼らはカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのようにそむいて滅びました。」と書かれています。

こうして聖書を見ると、カインは救われていなかったゆえに、彼はこのような行ないをしたのです。この行ないは彼自身がどのような者であるのか、その心を浮き彫りにしています。

2) エノク

次は5節にある「エノク」です。「信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。」、エノクは肉体的な死を経験することなく天へと導かれました。その理由が書かれています。「移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。」と。なぜ、エノクはこのような祝福に与ったのか？エノクは神に喜ばれていたからです。そのことについて旧約聖書にはわずかのことしか記されていません。創世記 5：21－24「:21 エノクは六十五年生きて、メトシェラを生んだ。:22 エノクはメトシェラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして、息子、娘たちを生んだ。:23 エノクの一生は三百六十五年であった。:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」、この短い箇所にも2回「エノクは神とともに歩んだ。」と記されています。これは「神を喜ばせていた」という意味です。しかも、300年間です。もちろん、私たちと同じように彼も罪人ですから、神の前に様々な罪があったでしょう。私たちが何度も学んでいるように、罪を犯したならそれを神に告白するのです。悔い改めて神に赦していただくのです。そうして神の前を正しく歩み続けていくのです。エノクを見たときに、聖書が私たちに教えるのは、恐らく、彼はそのように生きていたということです。罪を神の前に悔い改めながら、神に喜ばれることを考えて、そして、神とともに歩んだのです。

ですから、信仰をもっていたアベル、エノク、確かに、彼らは神に喜ばれることを行ないました。彼らの信仰がそのような行ないを生み出していきました。このような歩みを神は当然私たちにも期待しておられます。皆さん、神は間違いなく私たちが彼らと同じように神を喜ばせる歩みを継続することを望んでおられます。どんなときにも神の約束をしっかりと信じてその約束に信頼を置いて、神が言われたのだからその通りになる、神のおことばは必ずその通りになるという強い信頼をもって生きることを神は喜ばれます。あなたがそのように生きていくことを神は望んでおられます。旧約のミカ書 6：8にこのように書かれています。「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。【主】は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」

B. サタンの攻略

でも、そのことを望んでいないものがあります。サタンです。この前にも見たように、サタンは巧妙に皆さんのうちに働いて、皆さんがそのように生きないようにさせるのです。皆さんが「私は神の約束をしっかりと信じます。神が言われたことは必ずそうなる。私はそのように信じて神のみことばに従っていきます。」と、もし、そういうことになったならサタンにとっては大変なことが起こるのです。だから、サタンは様々なことをもって、私たちがそのように生きないようにと働きます。私たちが「神のために生きないように、神の栄光を現わさないように」と私たちを誘惑し、間違った方向へ導こうとするのです。それがサタンの目的です。

◎サタンの策略 : 創世記3章

1. 神のみことばへの疑念を抱かせる

彼はこのように質問します。「…神は、ほんとうに言われたのですか。」（創世記3：1）と。つまり、神が言われたおことばに対して疑いを抱かせるのです。実際にそのようにしてサタンはアダムとエバを誘惑しました。

2. 神ご自身への疑念を抱かせる

そして、みことばだけでなく、神ご自身に疑念を抱くようにサタンは働くのです。3章を見ると、「2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。3 しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」、エバとサタンのやり取りです。なぜ、サタンはこのようにエバに言ったのでしょうか？サタンは「神はとても利己的で自己中心な方ですよ。あなたにすばらしい祝福を与えたくないから食べてはいけないと言っているのです。」と、神ご自身を疑わせるのです。

3. 神のおことばに信頼しないようにと、疑いを抱かせる

どのように働くのでしょうか？私たちが神のおことばを聞くとき、いろいろな反応が起こります。

(1) 聞くだけで満足

ある人はこのように反応するかもしれません。そのような人がいないことを期待しますが、聞くだけで満足している人です。今日は礼拝でメッセージを聞いたからもうそれで十分、また来週聞きましょうと…。みことばは「みことばを実行する人になりなさい。」と教えています。ヤコブ1：22に「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはけません。」とはっきり教えられています。ということは、神がこのようにあなたにみことばを語られるときに、聞いているあなたには責任があるということです。それに従う、それを実行するという責任です。でも、多くの人たちは聞くだけで満足します。今日も聞けて良かった！と。その人はみことばを聞くだけだから信仰は成長しません。信仰が成長しない原因はそこにあるのです。聞くだけだから…。

また、もし、あなたがみことばを聞くだけで実行していないなら、あなたはこの地上で過ごせる祝福に溢れた人生を逃してしまっているのです。もう一度言います。みことばを聞くだけで実践しないなら、神があなたのために備えられたすばらしい祝福に溢れた人生を、あなた自身は逃しているのです。私たちは考えます。天国に行ったならすばらしい時間が過ごせるでしょうと。確かにそうです。でも、私たちは天国民として今この地上にあってその祝福を味わいながら生きることができるのです。そのすべてのカギは、神が言われたことを信じ受け入れてそれを実行するかどうかです。

でも、サタンはそのことを知っているから、私たちがそのようにしないようにと一生懸命私たちの邪魔をします。また、聞くだけで実行しないなら、この地上で主なる神の栄光を現わすというすばらしい機会をあなた自身で逃してしまっているのです。神はあなたを通して神のすばらしさを証しようとしておられるのに、あなたが実行しないから、悲しいことに、あなたを通して神の栄光が現わされません。それを喜んでるのはサタンだけです。でも、そうしてサタンはあなたが神のみことばを実行していないように、それに従っていかないようにと誘惑し続けるのです。

(2) 自分でできるかどうかを考える

また、ある人は聞いたみことばを自分自身でできるかどうかを判断します。これは自分にとって実行可能な？と。判断する基準が間違っています。自分の力で出来るかどうかを考えるのです。もしかすると、自分の体力を見て、ある人は自分を考える…、いろいろなことを見て「無理です、神様」と言います。たとえ、神ができると言われることであっても、自分ができないと思えば私たちはそれをしません。あくまで、それをするかしないかは自分自身の判断です。残念ながら、それは信仰ではありません。最初に見たように、信仰とは神が言われたことは必ずそうなると思えるものです。私がどう思うか、人が私を見てどう言うかではありません。「あなたも年を取って来たねー、働きができないでもう隠居す

るべきですね…」と。それを決めるのは神です。私たち信仰者は神に信頼を置いているのです。神がそうしなさいと言われるのは、できるからそう命じておられるのであって、それを受けた私たちは「はい、主よ、あなたを信じて行ないます。」と言います。それが信仰だと言います。

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」とヘブル 11：6で教えています。あなたが神に喜ばれようとするなら、覚えなければいけないことは、神が言われたことは神の助けによってできるという信仰です。それを信じるゆえに「どうぞ、私を使ってください」と自らをささげ、そして、神に頼って生きていこうとするのです。

サタンはあなたに働いていろいろな条件を付けさせます。「もう少し若かったら…、元気だったら、病気が治ったら、もう少し時間に余裕ができたなら…」と。神はそれを知った上であなたに「今、やりなさい」と言われるのです。そして、それをその通り受け入れて「分かりました！」というのが信仰です。そして、その信仰を神は喜ばれるのです。

憶えておられるでしょう？イエスと弟子たちが船に乗ってガリラヤ湖の反対側に行こうとしたときに、突風が吹いて来て船が沈みそうになりました。そのときに、弟子たちがイエスに駆け寄って何を言ったのか？ルカの福音書 8：24、25に書かれています。「先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです」と言った。イエスは、起き上がって、風と荒波とをしっかりとつけられた。すると風も波も収まり、なぎになった。」、そのときイエスはこのように言われました。「：25 イエスは彼らに、「あなたがたの信仰はどこにあるのです」と言われた。…」と。なぜ、疑うのか？なぜ、信頼しないのか？一番安全なところにいたのです。神であるイエスとともにいたのです。それでも人は恐れたのです。神を信頼するよりも自分たちの経験を優先するのです。「このままだと船は沈む」と。このような信仰をあなたは持っていませんか？神が言われることよりも自分の常識を優先する、神が言われることよりも現実を優先すると…。

◎ひとりのやもめ 列王記第一 17：10－16

皆さんよくご存じの記事です。シドンのツアレハテというところ、今のレバノン、イスラエルの北に当たるところです。預言者エリヤがそこに出かけていくのですが、そこでひとりのやもめと出会います。彼女はたきぎを集めていました。エリヤはこう言います。「水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。」「一口のパンも持って来てください。」と。彼女はエリヤに言います。「あなたの神、【主】は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一握りの粉と、つぼにほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて、死のうとしているのです。」、やもめがどのような状況に置かれていたのかが分かります。非常に厳しい状況です。最後の食事を取って死のうとしていたのです。希望がないからです。そのときエリヤはこう言います。「恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それから後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい。：14 イスラエルの神、【主】が、こう仰せられるからです。『【主】が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくなる。』」、あなたならどうしますか？あなたがこのやもめだったなら…？「いったい何を言っているの？私たちがどんな状況にあるのか分かっていない！今会ったところだから、」と去っていくのでしょうか？でも、このやもめはどのような選択をしたのか？確かに、エリヤに会うのは初めてです。いろいろなことを考えたかもしれませんが、彼女はエリヤが言った通りのことをするのです。「：15 彼女は行って、エリヤのこたばのとおりにした。」とあります。

「彼女と彼、および彼女の家族も、長い間それを食べた。：16 エリヤを通して言われた【主】のこたばのとおり、かめの粉は尽きず、つぼの油はなくならなかった。」と。

これが神なのです。こういうことができるのが私たちの神なのです。彼女はそれを経験できました。そして、このことを通して彼女は神の偉大さを現わしたのです。でも、もし、彼女が「無理です、神様、そんなことは…、非現実的です。あなたは何も分かっていない。」と言って、エリヤのこたばを信じなかったなら、神の栄光は現わされなかったのです。ということは、皆さんが今置かれているところで、神が「しなさい」ということをもししないなら、折角神がご自身の御力を現わそうとしているのに、その機会をあなた自身が摘んでしまうのです。私たち信仰者にとって必要なことは、神が言われたことは信じることです。それに値するお方だから「私は信じます。あなたが言われていることを信じます。」と。問題は、今、このような主を信じ切った女性はどこにいらっしゃるのでしょうか？こんな女性が私たちの群れの中にいるのでしょうか？

◎全盲で生まれた男 ヨハネ 9章

皆はイエスに聞きました。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」と。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」と。神はその病を使ってご自身の栄光を現わしたのです。神のわざを為したのです。どんな病を患っていようと、癒されることよりも、その病を用いて主の完全なわざが成されますように、あな

たの栄光が現わされますようにと祈り求める人はどこにいますか？私たちの群れの中にいるのでしょうか？「主よ、私が望むことはこの病を通してあなたのみわがが為されることです。確かに、私は病から癒されたい。しかし、それよりももっと大切なことは、これを通してあなたのすばらしい栄えが現わされることです。」と、そんな信仰者がどこにいるのか？そんな信仰者を神は使って来られたのです。ご自身の栄光を現わすために神は彼らを使われた。問題は、そのような信仰者が今ここにいるか？です。もっと言えば、あなた自身がそういう信仰者であるかどうかです。

◎アブラハム ローマ 4 : 18 - 22

このように書かれています。4 : 18 「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。」、自分たちに子どもが与えられることなどだれが見ても不可能である。「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。」とあります。神の約束を信じたからです。アブラハムを通して、空の星のように地の砂のように子孫が増え広がると、人間的に見て不可能な状況にあってアブラハムがしたことは、神の約束を信じることでした。このように書かれています。「:19 アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。:20 彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、:21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。:22 だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」と。アブラハムは全能の神を信じたのです。神が言われたことは必ずそうになると信じたのです。そして、神はアブラハムを祝して用いたのです。

ということは、神は私たちを用いてくださるのです。でも、そのためには条件があります。神を心から信頼し切っているかどうかです。神の約束は必ずそうになると信じ切っているかどうかです。神のみことばは必ずそうになると信頼し切っているかどうかです。私たちがどう思うかではありません。私たちの年齢も健康もすべてご存じの上で、神は「これをしなさい！」と言われた。神はあなたを使ってご自身の栄光を現わそうとされています。でも、そのすばらしい機会を逃しているのがもしあなただとしたら、悲しいことです。兄弟姉妹の皆さん、主を信頼する者になりましょう。神が言われたことは必ずそうなります。これまでそうだったのです。これからもそうです。神をしっかりと信じ信頼し、神のみこころが為されることを確信して今日を生きることです。「主よ、私を使ってください。」というその心からの願いをもって今日を生きることです。神は不可能なことを可能にされる方です。そのような神をあなたは信じたのでしょうか！その神があなたの神ならそれにふさわしく生きることです。信頼を置いて生きることです。信仰者の皆さん！！

《考えましょう》

1. 神が喜ばれる「信仰」について説明してください。
2. 神を喜ばせるために「信仰」が必要なのはどうしてでしょう？
3. モーセが約束の地に入れなかった理由は何でしたか？
神がそれらを喜ばれないのはどうしてですか？
4. 神を信頼した者たちを用いて主はどのような働きを為さいましたか？
この主の働きのために彼らを用いられたのはどうしてだと思いませんか？